

2014年4月1日

学長 尾池和夫

## 2014年度を迎えて—京都造形芸術大学教職員総会挨拶

いよいよ京都造形芸術大学のキャンパス整備に着手する年度を迎え、すでに工事の一部が始まっています。瓜生山学園は、2016年度に40周年を迎えます。それに向けての大規模なキャンパスの整備、学生の就業力を育成する、また、社会人に対する芸術教育活動の普及と拡大という教育改革への取り組みを実施します。これらの準備段階から、いよいよ実施の年を迎えたという共通認識に立って、今日の教職員総会の内容を準備してきました。

荒川先生、佐藤先生の説明と多少重複しますが、改めて私からも教育改革の取り組みについて所信をお伝えしたいと思います。何よりも、学生のための教育の質を保ち、教員自身が教育力を高めることが、具体的に求められる年度です。さきほど、今日の17時を締め切りにして、2013年度の教員の自己点検評価書を提出して頂きました。教員一人ひとりの教育活動を中心にしつつ、さらに研究、社会貢献の活動を自己点検して頂きました。今回は、それらを相互評価して教育の質の向上に資する方針です。

このような学内での評価よりも、学外への活動に専念する方が重要であるという考えもあります。その通りと私も思いますが、本学においてすべての教員に、それができているとは言えない現状という認識から出発していますから、学外への活動のモデルを示す力量のある先生方は、ぜひ2013年度のこの自己点検評価の作業を通して、京都造形芸術大学モデルを創造し、普及するようご尽力をお願いしたいと思います。

今年度は、カリキュラム改革と連動しつつ、キャリア支援の充実をはかる年度でもあります。卒業に向けて就職率を高めるための支援を、1回生の時から、それぞれの授業の中で意識的に行ってほしいと思います。同時に、卒業までの段階で、さまざまな事情で学園を去る学生も多いという事実を見つめて、中退率を低くするというこも、日頃

の学生との会話の中で意識しておいていただきたいと思います。

キャンパスの整備は、学生の安全を保証するために、まず実行しなければならないことでもあり、同時に教育の質を高めることを目ざして行われます。そのため、一時的には必要な空間の確保のための教室のやりくりなどで、教職員の皆様のご理解とご協力が重要となります。さまざまの工夫をお願いしつつ、整備の途中で気づいたことを、すばやく教えていただきたく存じます。

東日本大震災から3年、2014年3月11日の朝、京都市ではシェイクアウト防災訓練が行われました。これは、市民、事業者、観光客、通勤・通学者を対象に、京都市防災一斉行動訓練を実施するものでした。同時刻一斉に参加者全員が机の下に隠れるなど、身の安全を図る行動をとって、自宅や会社などでの日ごろの防災対策を確認するきっかけづくりにするというものです。

3月11日、私の出勤の途中、三条京阪駅でも予告のアナウンスがありました。朝の9時30分すぎに、本学でも、昨年に引き続き参加することを宣言して実施しました。教職員だけでなく学生も含めて実施するという方針で、9時過ぎに構内放送で訓練の告知をして、速報メールが流れたら直ちに机の下に隠れ、周囲に机がなければ頭を抱えて姿勢を低くし、行動を取っていない人がいれば声をかけるというものでしたが、参加された方、手を挙げてみて下さい。(京都以外にいた方も多い中、かなり多くの手が上がりました。)

今年も職場で怪我のないよう、また心身の健康に十分に留意して、教育と研究と社会貢献の仕事に取り組んで頂きたいと思っています。そのための一つとして、学内の分煙に関する改善が行われています。担当者が調査した結果、さまざまの場所で、なし崩しに喫煙場所ができていくことが判明しました。ゴミと吸い殻が入ったバケツがあったり、大型のゴミとともに吸い殻が散乱している場所がありました。キャンパスの整備に合わせて、8か所に喫煙場所を設定します。その場所を示す掲示も充実させるようお願いしていますが、皆さま方のご理解とご協力もよろしく申し上げます。

明後日の入学式を迎える新入生の多くは、ゆとり教育の世代です。知識重視型の教育方針は詰め込み教育であり、それを改善する目的で学習時間と内容を減らした時代の教育を受けて来ました。その推進役でもあった本学教授の寺脇研さんは、ゆとり教育で学習した世代の人たちが「自分の言葉で語る」と、その成果を評価しています。私も、本学の学生たちが本当に自分の言葉で語るという実感を持っています。この世代が社会で活躍するとき、その本当の評価が出ると思っています。

今、ゆとり教育に対する評価が分かれています。批判に応じて、2011年度からの学習指導要領では、ゆとり教育でも詰め込み教育でもなく、「生きる力をはぐくむ教育」となりました。これは本学の教育の基本にも通じるものでありますが、本学の教職員の皆さんは、企業人たちが性急に学力の低下などと話していることに、安易にとらわれることなく、京都造形芸術大学の理念に照らして、ゆとり教育世代の学生たちに接してほしいと思います。私は、自分の経験に基づく直感から、芸術系大学の学生として、ゆとり教育で育った人たちの中から、きっとすばらしい人材が本学に入ってきていると確信しています。

新年度を迎えて、お話ししたいことはたくさんありますが、本日の教職員総会では、本学の教育改革について、くわしく総合的にまとめて報告していただき、それをもとに新年度のカリキュラムに取りかかっていたいただくのが主な目的で、それに大きく時間をとっていただきましたので、私の話はこの程度にしておきます。

今まで議論してきたことを改めてしっかり認識して、教育と研究と社会貢献に、皆さんとともに取り組んでいくことを誓い、私の所信表明といたします。

ありがとうございました。

尾池和夫